

tact_web_interview

山本尚毅さん

1983年石川県生まれ。北海道大学農学部農業経済学科卒。2024年北陸先端科学技術大学院大学修了(知識科学)。新卒6ヶ月ごろに本村と一新塾で出会い、2年後に会社をともにつくった。Granmaを離れた後は、学校法人河合塾にて中高生の総合的な探究やキャリア教育のカリキュラムデザイン業務を経て、2023年5月より株式会社日本総合研究所入社。

取材日時 2024年12月10日

場所 武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパス 自律協生スタジオ

Granmaの期間は、僕の人生の中で非常に大きなものでした。あまりに大きすぎて、うまく言葉にするのが難しいですね。ただ一つ言えるのは、今まで本村拓人ほど変な人に出会ったことはないということ。もちろん、ただの「変な人」ではなく、節度を持ちながらもどこか常識を超えた存在でした。彼の独特さを噛みしめれば噛みしめるほど、まるで昆布のように毎回違う味がするような感じです。彼は新しい場所に行って異なるものを吸収して帰ってくる。そのたびに話してくれる内容はまとまりがないんだけど、そこがまた面白いんです。僕はそんな彼を面白がって、自然と近くにいました。

Granmaという名前自体も想像力を掻き立てるものでしたね。チェ・ゲバラが革命前夜にキューバに乗り入れたときの船名「グランマ号」に由来している名前です。社名に興味を持った人に説明すると「なんか怪しいやつら」と思われる。でも、それすらも苦労と思わず楽しんでいました。正直、拓人に初めて会ったときは、会社を作るとも、ましてや「世界を変えるデザイン展」のようなエポックメイキングな展覧会を開催するとも思っていませんでした。BOPビジネス(途上国市場におけるビジネス)なんて概念も知らなかっただけで。それが仕事になるという感覚も、やりながら実感していくんです。当時の僕は、ほとんど24時間中18時間くらいGranmaのことを考えていました。今振り返ると、自分のリソースのほぼ全てを注いでいたと思います。

僕は情報収集がとにかく好きで、情報を集めると全体像が見えてくるんです。この人がキーマンだとか、この角度で話を持っていけば動くだろうなとか。そこまで整理したら「はい、あとはよろしく」と他のメンバーにパスするんですけど、要所要所では自分でも人に会いに行ったり、ネットワークを開拓したりしました。ただし、それも完全に興味本位。組織のために会いに行くのはどうしてもダメだと感じてしまうんですよね。でも、そうやって興味本位で会った人が、後々つながっていくことも多かったです。

拓人が持ち帰ってくる人脈や出会いも、僕の中では再編集して「こういうふうに使えるんじゃないかな」と考える感覚でした。彼の周りには本当に面白い人たちが集まっていて、そんな東京の華やかな人脈を見て、「ああ、これはまさに東京の人たちだな」と感心しながら関わっていましたね。表参道でイベントをやったり、西麻布でパーティを開いたり。その場に集まる人も、利害や人脈を超えて「ただ面白い」という基準で引き寄せられてきたんです。そういう磁力が拓人にはあります。

当時のGranmaは、「培養」という言葉がぴったりくる状況でした。世の中のトレンドとしても、社会起業や(大学の卒論テーマでもあった)ソーシャル・イノベーションが注目され始めていて、社会課題がビジネスになるというムーブメントがありました。BOPビジネスという新しい文脈があつて、途上国の課題に強い関心を持つ企業や人に敏感な若い人集まってる、そんなタイミングでした。

中でも僕が強く覚えているのは辻くんです。SFC(慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス)の中山俊治さんの研究室にいた彼は、障害やソーシャルインクルージョン、途上国ビジネスの文脈で相性がよく、一緒に仕事を始めました。ただ最初の印象は「喧嘩売ってるのか?」と思うくらい生意気でした。その辻くんが、いきなりバングラデシュに飛ばされて、「ソーラーランタンのプロトタイプを作っこい」と言われる。英語も話せないし、それまで海外経験もなかったのに、です。拓人が最初の数日は同行したもの、あとは放置。それでも辻くんはやるしかない、という状況に追い込まれていました。今思うと、無茶ぶりのレベルが尋常じやなかつたですね。

Granmaの案件はどれもそんな感じでした。企業案件としてスタートするんだけど、クライアントの期待値がそこまで高くなくて、僕たちの「ベストエフォート」で許される。だから、そこから先は自分たちのためにやっていたような感覚があります。コンサルタントやシンクタンクの世界では、よく「期待値をコントロールしろ」と言われますが、Granmaではそういう発想がまったくなかったですね。クライアントの満足度だけを気にするんじゃなくて、純粋に面白いものを作る。それが、当時の僕たちにとって当たり前のやり方でした。

2011年の初め頃、たまたまTwitterで「白金台付近で部屋を探している」というツイートを見かけました。当時僕の住んでいた家に空き部屋があったので、「住む?」と軽い気持ちで声をかけたら、話が進み、まったく知らない男女が一緒に住むことに。さらに数ヶ月後には、その女性の弟が上京してきて、僕の家に居候するという展開に。結果として、その弟がGranmaに関わるようになり、今ではスタートアップの経営者として活躍しています。意図して「培養」したわけではないけど、そういう環境が自然と生まれていたのがGranmaの魅力だったと思います。

あの時代、ソーシャルイノベーション界隈は「最も面白い場所」だったんです。無理難題に挑む僕たちの姿勢に惹かれて、優秀な若者たちが勝手に集まってくる。もちろん、みんなその後は自分の道を歩んでいるけど、彼らが追いかけているものにはGranmaでの経験が少なからず影響しているように思います。

僕自身、Granmaではとにかく目の前にあるボールを拾い続ける日々でした。たくさんの情報をを集め、それを自分なりに再編集して、世の中に意味のある形で提示する。拓人が集めてきたものを僕が日本に落とし込む、そんな役割を担っていました。

タイムマシン経営の考え方を取り入れたり、拓人がセンターで引っかけてきた「先端」のものをリサーチして、日本でどう展開できるかを考える。拓人の本棚に並ぶ孫正義や革命家たちへの憧れがありつつも、現実的なサバイバル術としての波乗り感覚も求めていました。

Granmaが終わった後、僕は河合塾を経て現在は日本総研で働いています。今でもGranmaでの経験がベースにありますね。拓人のような「変なリーダー」と一緒に仕事をした経験は、他では得られないものでした。それに比べたら、どんな人とも柔軟に仕事ができる自信があります。いまだにGranma時代のネットワークは生きています。最近では、Granma時代の仲間から紹介された若い子と一緒に仕事をしています。彼は革命家気質で、どこか拓人に似た雰囲気があります。こうやって、Granmaのエコシステムは今も僕の中で息づいています。

(聴き手:酒井一途)